会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和５年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業  （２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第3回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会 |
| 開催日時 | 令和5年11月16日（木）15:00～17:00 |
| 場所 | 学校法人麻生塾　10号館 |
| 出席者 | 事業責任者：岡村　慎一（OL）、成底　敏（OL）　　　　計2名  委　　　員：植上　一希、松田　義弘、佐藤　昭宏（OL）、  丹田　桂太、佐藤　善邦（OL）、水田　真理（OL）、  小田　茜（OL）、小田　政江　　　　　　　計8名  請負業者　：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計11名 |
| 議題等 | 1. はじめに・本日の目的等について（植上）   この間、みなさんに各学校等への調査を進めてもらった。まだいくつかの調査は残っているが、残りは福岡の専各と、日本工学院を残す、という形になっていて、それ以外の学校、並びに団体への調査は予定通り終わっている。本日は、今まで調査してきた中身について、共有していくこと、そしてそれを基に意見交流をしていくことを目的としてやっていきたい。福専各と日本工学院が残ってはいるが、それも後日、共有するが、まずは現段階で一通り終わっているものを共有していきたい。やり方としては、各団体、各学校の取りまとめの責任者に報告をしてもらう。小田（茜）さんが終わりの時間があるということなので、小田（茜）さんに最初にしてもらって、その後に、佐藤さん、水田さんからNSGについて話してもらいたい。そして、丹田さんから、昨日行ったTCE財団の調査についても報告してもらう。   1. YIC学院・麻生塾・KBC学園調査結果報告について   〇配布資料により報告（小田茜）  ----------------補足・意見交換  〇**丹田**（YIC、KBCについて）  　基本的に、まとめられている情報で十分かなと思う。YICの話は、研修の話とずれるところもあるが、アシスタント雇用制度という形で、調理系の学科のところで卒業生採用と書かれているが、それ以外のところでも、卒業生を採用していくという制度を始められたという話を聞いて、その点は非常に興味深く感じた点だった。KBC学園のヒアリングに関しては、特に新任研修の内容、3月後半に5日間とまとめてもらっているが、この5日間のうちの2日目くらいに、KBCの学校理念を集中的に、まず新任の先生方に抑えていくというような、5日間の研修の全体の設計の中で、その前半部分を学校理解にあてている点は、特徴的だったかなと思う。  ・特にKBCでは、新任でクレドとかも含めて、学校理念というものが特に新任研修では、力を入れているところが、丹田さんにとっては、すごく大事だったんじゃないかということ。**（植上）**  〇**小田（政）**（YIC、KBCについて）  　私としては、YICでヒアリングを受ける側、KBCでヒアリングする側で関わらせてもらったが、1つはこの教員概論の開発をするにあたって、主軸をどこに置くのかが大切なのかなと思った。新任からの成長っていうところを考えて行くのか、新任のところであるのであれば、そこのところに集中して聞いていったらいいのかなというのは感じた。私共のところでは、後から資料を送ったが、2日間でばらけてやってしまうので、新任からヒアリングするにあたって、あまり頭に残っていないと言われる。継続的な研修の内容であったり、最低限ここは押さえておいた方がいいなとか、各学園聞いていく段階で共通項が見いだせるのであれば、そこは押さえておいた方がいいのかなとは感じた。どうしても中途採用が多い場合は、学園・学院の法人の理念であるとかが大きいが、今回はそこではないところがまた1つあるんだろうから、そこではないところで、各法人がここは評価してほしいという希望のものがあれば、そこを作っていくと面白いものができると思った。  〇**松田**（YICについて）  　内容面で補足することは特にないが、感じたのは、課題とかこういうことをやらないといけないということはよく把握しているけど、実際にそれをどのようにしていくかというときに、時間がなかったり、そのやり方がわからなかったり、やることは見えているけど、それを具現化していく、どういうふうに研修において、それをやっていくかというのが、時間がないとか物理的な問題とかを抱えていて、それを解決することが1つ課題になるのかなと、それは麻生塾も全く同じだと思うが、そういうところに同じ悩みを抱えていることは感じたこととしてあった。  〇**植上**（麻生塾について）  麻生塾さんは、すごくシステムを作られているなというのが、インタビューをしての印象。資料にまとめてもらっているように、SD研修、並びに新任研修とは別のFDが作られたうえで、特に新任研修というところにかなり注力されていて、月に1回、OJTと絡めながら、OFF-JTを入れていくというような作り方が非常にシステム化されているなというのが印象に残ったし、また、担当者の方からすごく膨大な、今回のインタビューに関する貴重なデータをもらっていて、すごく作り込まれている、調査などもいろいろな形でしていることが分かった。この辺りは、麻生塾さんが1つのグッドプラクティスになるんだろうな、というのは、岡村先生とも帰り道で話しながらいたところ。一方で、岡村先生も言っていたことだが、麻生さんだからできることかもしれないと言っていて、人材の問題や資源の問題があるときに、他の中小の専門学校が、麻生さんがやっていることを、どのように参考にするのか、というところは、より丁寧な検討が必要なのではないかということは、岡村先生と話をした。また、小田（茜）さんがここで書いているが、外部研修との関係ということについては、麻生塾さんはほとんど意識されていないところも印象的で、もちろん福専各とかがやっているところには、是非行ってくださいってことだと言っていたが、それはそれで、一方で、麻生としてしっかりとプログラムを立てていく、保証していくという姿勢を出しているのは、1つ印象的だったと思う。おそらくこれは他のKBCさんやYICさん、また他の専門学校さん、各専各やTCE財団の取り組みとの関連性みたいなところも、論点になってくるところかなと思う。  〇**小田（茜）**（他の委員のコメントを聞いて）  研究者内での理解として、教員概論のテキストを作成するための調査だと認識しているが、職員と教員の区別のところが、教員を基本想定しながら動いてはいるが、結構、職員の話や教員から職員に移っていく方が将来的にいたりするので、このテキストの焦点を新任に絞り込むか否か、によってもどの程度までヒアリングを深めていけばいいのか、自分自身迷いがあったので、今回は、教員を中心に聞き取りをしたという経緯になるという確認。  ・教員と職員の区分けみたいなこと、これは各学校さんでも苦労されていたり、仕組みづくりをしていたりするのかなと思うが、こちら側で今後作っていくときに、どこに焦点化するのか。それは、おそらく小田（政）先生も言っていたように、テキストの実際の軸をどこに作るのか、ということとも関係することかなと思うので、この辺は1つ論点としてメモしておきたい。**（植上）**  **〇成底**（KBCについて）  　小田（茜）さんがまとめてくれた通りということと、麻生さん、YICさんと比べると、キャリアモデルというところが課題としてあるなというのは非常に感じているところでもあるので、是非この事業の方で、キャリアパス、それぞれの入社、社歴ごとに必要な事項をまとめていけるような、1つのきっかけにここがなっていければいいかなと感じた。  3.国際総合学園インタビュー調査について  〇配布資料により報告（佐藤（昭））  ----------------補足・意見交換  〇水田  　基本的には追加することはないが、感想的なところでいうと、NSGさんは法人組織が非常にしっかりしていると思った。それによって研修の全体像や役割分担が、しっかり区分されていて、法人が全学校、これは大学も高校も含みということだが、全学校、全学校種に対して共通のところは法人の方で引き受けてやる、それと学校でやるべきものをきっちり分けている感じ。それから、大学とか高校もというところで、大学だったらこういうバージョンになるんだけど、専門学校とか高校だったらこういうバージョンだよねっていうところを、しっかり区分されて実施しているというところがシステムを作って、しっかりしていると思った。ただ一方で、小田（茜）さんに報告してもらったことと重なるかもしれないが、教員個々の経歴が違うというところで、個別のパスが聞きづらいというところで、そこに対する、例えばマネジメントとかハラスメントというところは共通でやれるが、個別具体的なところになると、どうしても各自の経験が違い過ぎることによって、研修のプログラムにまでいけないというのが共通の悩みとしてある、ということだった。  〇佐藤（善）  　学園側でコーディネートをさせてもらった。私共も、こういったことで、逆に自分たちの課題がはっきりしたところもあるので、こちらの研修委員会の方で、取り入れていければと思う。  4.TCE財団調査結果報告について（丹田）  〇配布資料により説明（丹田）  ----------------補足・意見交換  〇植上  　肝は丹田さんに報告してもらった内容になるかなと思う。大事だと思ったのは、何を目的にするか、といったときに、資質・能力の向上だという話があったが、そこをもう少し聞くと、「底上げ」という発言があったのは、結構大事かなと思っていて、すなわち高度なレベルの教職的な能力をつけるというよりも、最低レベルの基本的な教職的な知識だったり、スキルをつけることを今でも目指しているという話をしていたのは、まず大事なポイントかなと思う。で、それが歴史的な経緯だったり、また現実的な状況の中で、このような姿勢をTCE財団が取っていることを確認できたのは、他の団体、他の学校とか、法人との重なり具合とか、みたいなことを考える上で、非常に重要なポイントだったのではないかと思う。一方で、課題感みたいなこともいろいろと言っていて、結局は各専各任せにならざるを得ない、という話を繰り返ししていたし、当初は、大学の教員の方々に教職課程の代用的なものとして展開するということを考えていて、今も考えているということだったが、本当の話、それができるのかって話は別の話だよね、というところは菊田さんも、菊田さんだけではなく言っていたことかなと思っている。つまり、ちゃんと実現できているかどうかというところは、空白というところ。それと、ありがたいことに、13でやっているパワーポイントとかは全部保存しているということで、なんなら送るよ、ということだったので、見ようと思えば見れるので、そういったものを見ていくというのも、必要であればしたいなと思った。福専各に行くときに、今日の全専各の話を頭に置きながらやっていくことになるかなと思うが、福専各の話を聞くと、より立体的に見えてくるものがあるのではないかなと思う。要するに、専各に任せているけど、実際どうなのっていう話をできるかなと思った。  〇水田  　基本的には、言ってもらったことでいいと思う。これは筋から外れてしまうかもしれないが、47都道府県13都府県で実施しているが、この残りのところのほとんどが、以前調べたところ、医療が中心となっている県では、ほぼ抜けている状況になっていて、それから菊田参与が言っていたところでいうと、全専各連に看護系の学校が入っていない、そこはそこで、看護学科協議会とかがあって、独自で研修をやっている話もあったので、看護に特化しているわけではないが、そういったところもどうやっているのか見ていく必要性を感じた。  〇佐藤（昭）  　先ほどのNSGさんの話と合わせてTCE財団の話を聞いていて、考えることや学びが多かった。今回なかなか難しいなと思っているのは、最終ゴールは教職概論を作っていくというようなことで、その対象は、今回インタビューしているのは、大規模校というよりは、地方の専門学校で、なかなか自前で研修をしていくのが難しい学校を、想定していかないといけないとなったときに、自分の頭の中では、変換しながら聞いていたところがあった。その時には前提として、養成のことだけ考えていてはだめだと、昨日の話の中でも、会議後に雑談で話していたが、なり手、専門学校教員になりたいとか、そういった人をどう増やしていくかを想定しながらこれから概論を作っていかないといけないということがあるのかなと思う。NSGさんの話を聞いていても、新潟のおひざ元は流石に、しんどい分野だけが卒業生に頼ればいいという話だったが、福島はそうではないって話があったので、採用をどう変えていくのかとか、なり手をどう増やしていくのか、ということを考えたときに、また、岡村先生がチャットで書かれていたような、もっと卒業生、在校生も含めていいのかもしれないが、卒業生や在学生に対して、キャリアパスを見せていくとか、職員としてとか、助手としての実務経験をということを具体的に書いていたが、そういうキャリアモデルの提示の仕方をどう変えていくのかということも含めて、概論を書いていく必要があるのかなと感じたのが1つ。もう1つはキャリアイメージの魅力化とかを、概論の中では含めていかないといけないのかなと思った。というのは、マネジメントの部分とか理念の浸透とか、コンプライアンスのところは学校経営や学校のリスクに直結するようなところは、わりかしやられているのかなというとことは、分からないけど、何となくそんな気がしたが、例えば教育方法とかは、なかなかそもそも、いろいろと変わってきている中で、教え手に困っていたり、逆に専門学校制度みたいなところの教育をする人がどんどん減っているという話もあったので、その辺りはちゃんと概論の中で、全体で発信していくような、団体がコンテンツを作って、教育を受けられる環境を作ることが必要なのかなと思ったし、専門学校教員をもっと魅力化するという内容を組み込むときに、自分がちゃんとデータをこの研究会に出していければと思うが、やっぱり社会での活躍から見たときに、専門学校の卒業生がちゃんと社会でも活躍していっているみたいな、社会的価値、社会的機能みたいなものを、概論の中に盛り込んでおいて、これから先生をやっていく人が、この仕事は大事だと思ったり、これから先生になろうかなと考えている学生の人たちが、やってみようかなと思える内容を、どう盛り込めるかが、過去まで作られているものとの差分というか、どこで我々が付加価値を載せていくのかということを考えると、昨日の菊田さんの話とか、NSGさんで聞いた話を踏まえると、その辺がポイントになっていくのかなと個人的に考えていた。  5．全体に関する議論  〇小田（茜）  　先ほど、佐藤（昭）さんが言ってた専門学校教員の魅力というところは、テキストの中に盛り込んでいきたいと思っていて、いいんじゃないかなと感じている。ただ、そこに関して今回のヒアリングでは十分に聞けていなくて、吟味していかないとなかなか書くというのは難しいかなと思う。あとは、各学校3つに調査をさせてもらって、他の学校さんのことも聞いて思ったのは、配慮が必要な学生に対する支援を、先生が抱え込んでしまう、先生のケアも必要みたなところの論点はどこも共通してあって、ただ心理的ケアみたいなことをテキストの中に盛り込むことは難しいと思うが、そういった学生に対する困り感があるというところで、何か専門学校の先生方にとって意味のある内容を盛り込めるといいのかなと思った。あともう1つ気になったのは、職業領域の専門家としての側面の課題のところで、年数が経つごとに、技能・技術が陳腐化していくという中で、職業領域的なアイデンティティも含めて、どういうふうに継続していくのかという論点も、各学校での課題となっていて、その点に対してテキストでどう伝えていくか、出していくかは、またここで議論して考えられるといいかなと思った。  ・今回、小田（茜）さんに、こういった表にまとめてもらって、分かりやすかった。また、今後これを1つの枠組みにしながら、他の学校の調査とかも、共通でまとめていければいいなと思っているし、報告書作りのときにも、これがたたき台というか、ひな形になるかなと思っている。（植上）  〇植上  　改めてになるが、今回こういう調査をしているのは、そもそもまず専門学校教員の研修を巡って、いくつかの団体別に、視点別に、そこで行われていることの現状を見ていかないことには、このテキストの作る必要性だったり、作る方のポイントがわからないだろうというところで、今回調査を行ってきたと思う。すなわち、TCE財団や各専各、並びに大規模学校だと、学園とか法人全体の取り組み、さらには、各学校での取り組みというような、大きく3つくらいの主体が設定されていて、その主体ごとに、どのような目的や課題感を持って、そして、誰を対象に、どのような内容をしているのか、ということを、事実レベルで浮かんできたかなと思う。まだこれを整理する作業はこれからになるかなと思うが、その際、今回いろいろとまとめてもらったように、まず誰を対象にするのかと言ったときに、各学校さんでは、教員と職員という区分けをされているところは1つポイントかなと思う。また、それを区分けした上で、FDとかSDというような形で、教員向けの研修と職員向けの研修、重なるところもあるが、そういうことがされていることが分かったのは、1つ大事な事実の確認になるのかなと思う。一方で、TCE財団とかがやっているのは、かなり教員に焦点を当てた形で、教職課程の本当に必要なものを新任研修段階ではやるというような内容感とかレベル感も1つ明らかになったかなと思う。一方で、各法人さんでも細かな教育の研修は学校にお任せしますよ、みたいなこともされているというのが、現実なのかなと思っているところ。すなわち、教員と職員という区別をしたところで、教員というところに絞ったときのある種のレベル感とか、内容みたいなとことは整理していくとできるのではないかなと思う。さらに、工夫とかも見えてきたかなと思う。例えば、麻生さんのOJTとOFF-JTを組み合わせてやっていくということもあるし、KBCさんがやられているように、とにかく初めの段階で理念をしっかりと注入していって、その上で模擬授業とかをしていって、とにかく初めの段階を乗り切っていく、モチベーションを作っていくみたいな工夫をしているというところも見えてきたのかなと思う。多分、大事なのは、こういったことを図式化していきながら、これは報告書レベルでやっていきたいことだが、図式化したり、工夫しているポイントとか、各学校の課題感みたいなことの整理は今年度の1つの到達点としてしていきたいなと思う。これは研究者で引き取るのか、また次の委員会でやるのかというのはあるが、また担当者を何人か決めて、WGで練りたいなと思う。その上で、先ほど佐藤（昭）さんがあげられていたところは、ポイントになってくる。私たちがもう1つの課題であるテキストを作っていくときに、どこに焦点を当てていくのか、これは先ほど小田（政）先生が、どこを主軸にするのか、誰を対象にするのかという話でもあるし、また佐藤（昭）さんも、卒業生や在学生みたいなことも見据えてもいいのではないかという話もあるかなと思う。また、佐藤（昭）さんは、キャリアイメージの魅力化というような話も出していたが、僕なりに引き取ると、専門学校教員の魅力化と言ってもいいのかなと。キャリアイメージだけでなく、普段の授業とか、普段のやっていること、学生との触れ合いの魅力、やりがいみたいなことを盛り込んでくことも、1つのオリジナルの、もちろんキャリア自体魅力だという話もあると思うが、この辺りも1つ大きなポイントになるかなというのは、先ほどの佐藤（昭）さんの話を聞いたり、多分、他の学校さんでなかなかなかったりする、すごく大事なことなんじゃないかなと思った。一方で、小田（茜）さんが言っていたように、学校で出てくるのは、学生対応の難しさがすごく出てきているだろうと思う。専門学校の学生にどういうふうにアプローチするのか、というところも、旧来の心理学的な関りはもちろん踏まえながら、専門学校の学生にどうアプローチするのか、みたいな観点みたいなところを盛り込んでいくと、このテキストのオリジナリティとか意味みたいなことはあるんじゃないかなと思う。アイデアベースだが、職業を通してコミュニケーションを取っていくというところは、1つの魅力かなと思うし、それこそ小田（茜）さんが研究しているような「好き」を軸にしたような形でのコミュニケーションを取っていくことだって、1つのアイデアになるかもしれない。一方で、専門学校生がどのような子たちが入っているのかとか、学力が二極化している子どもたちに対するクラスづくりみたいなところを、より具体的なレベルで検討していくようなテキストとか、アイデアみたいなことが出せると、すごく大事なものになるのではないかなと、最後の話を聞いて思った。少し話過ぎたが、委員の皆さんから、こういった観点が今出てきている調査から見えてくるのではないか、ということをアイデアでもいいので、意見がもらえればと思う。  〇小田（政）  3点ぐらいあって、先ほど専門学校教員を魅力化するという話があったときに、今回調査をして思った時に、専門学校の教員って、結局、大手校だとああやって人を雇えるが、やっぱり欠員補充が主になってくるので、やっぱり新任で入ってきたという時系列で見るのか、もともと持ってるその人たちの指導力は、ばらつきが大きいっていうところが、すごくいろんなキャリアをもってる実務家教員が多いっていうところが1つありつつ、そこのばらつきをどう考えて、設計して行くのかっていう課題、問題があるのかなと思う。それともう1つの魅力化するっていうところで、先日うちの2年生の授業にちょっと入った時に、学生から言われたことが、こんな学校と思わなかったと、こんな学科と思わなかったと、オープンキャンパスと全然違うじゃないかと。どうしてって聞いたら、取らなくてもいい資格とかをたくさん取らされる気がする、であったりとか、結局は動機づけがうまくいってないんだろうなっていうのがあった。その魅力化っていうのは、どこに視点があるか分からないが、学生の視点から見たら、大学と違って、面白くて役に立って、実践教育が受けられると思って入ってきてる感じが、うちの学生からは感じられた。だから、実践教育を提供する上で、どういう教育方法だったり、その辺もいるのかなというのは感じた。あとは先ほどのTCE財団の方が言われた「底上げ」、「最低レベル」っていうところが、どこから始まるのかって考えたら、例えばやっぱり私学法とか、教学マネジメント、専門学校で言ったら職業教育マネジメントの基礎を知ってる、やっぱりなんで自校が、どんな人材を育成しようとしてて、そのために3ポリシーをどう立てていて、その3ポリシーからどうカリキュラムを立てていて、でアセスメントポリシーを立ててるかっていう、その基礎ベース知識を、もしかしたらいろんなキャリアを持ってる実務家教員は知らなかったりとかするので、そのベースを、例えばeラーニングとか事前学習で入れていくとか、あとはそれを踏まえての教育指導方法、シラバスはどういうふうに自分の学校のシラバスチェックしてみたりとか、でその次の段階でコマシラバスのチェックをしながら、自分の模擬授業を皆さんでやってみるとか、結局その指導方法っていうところも魅力につながっていくかもしれないなと思った。やっぱり学生からしたら、やっぱ効率が良くて、面白い授業と言ったらアクティブラーニングとかになるのかもしれないし、その上でのやっぱ多様な学生対応っていうところも、今からの課題なのかなっていうところがあるので。その3点が、専門学校教員を魅力化する、学生の視点がある、FDとしてのベースいうところの3点で観ていくと、もっとなんかいいものが作れるのかなという気がした。  ・特に最後の論点、専門学校教員にとっての最低限の知識ってなんなんだろうかっていうところとか、それの洗い出しとか、それを整理しながら、魅力的に映っていくっていうような工夫ができると、すごく難しそうですけど、でも是非やりたいなあというふうに思った。あと、やっぱり生徒視点は大事だなと思った。（植上）  〇松田  教員の魅力っていうのが先ほどから出ているが、私がちょっと専門学校教員の魅力っていう意味がはっきりしない。というのは、最初から専門学校の先生になりたいという人はいない、極端に言ったら。何が言いたいかというと、例えば専門技術を勉強します、特に看護の先生でもいいし、美容師でもいいが、美容師の学校に行きました、でもこの美容師の学校に行って、美容師の免許取ります、技術を勉強しましたってのは、別に教員になるために、専門学校に行く人なんていないと思う。そういう人たちに、専門学校教員の魅力を出して、専門学校の先生に、なりなさいよ、なったらいいよ、という話なのか、ちょっとそれがはっきり頭の中でしなくて。それとも、もう美容師やめますと、じゃあ次何か仕事をしたいという時に1つの選択肢として、専門学校の教員が1つの職種の選択肢としてあると。その時に魅力を伝えるという話になるのか。魅力というのが、どういうふうな魅力なのかがわかってなくて、テキストの中で魅力を伝えるという意味が、どんな魅力の伝え方をするのか、どういう人を対象に、どういうふうに魅力を伝えるかという話になるときに、魅力って何だろうなと。それともう1つ専門学校の教員とは、と言われた時に、パッと答えるときに、なんなのか、専門学校教員はどういうものですかって言われて、問われた時に、どう答えるか、そこから始まると思う、専門学校の教員とは、教師とはって。小学校の教師とはってのは、ある程度答えがある、中学校の教師とはってのもある程度答えが出る、高校の教師とは、大学の教師とはというのも出る、同じような意味合いで、専門学校の教員とはって、なったときに定義はどういったものか。そういったものが確立していかないと、今の話が出てるテキストを作っていくときに、それがあってじゃあどういうものが必要か、そういう教員にはどういうものが必要か、そういうものが必要だから、そのために研修とかしていくっていうようなストーリーになっていくのかなと思ったので。話がまとまってないですが、話を聞いた中で思ったこと。  ・本当に今のお話を聞いて、特に後半の部分で、実は私たちがあまり言語化してない、様々な問いというのがあるはずで、それこそ専門学校の教員とはっていう問いについても、いろんな観点から実は言語化していかないと本当はいけないんだろうなと思う。本当に辞書的な定義とかしちゃったら、専門学校にいる人みたいなすごいつまらない定義ができちゃうし、またこの間は資質能力っていう観点から専門学校教員とは、みたいな話が中心的に、文科省でもされてきたなと思うが、資質能力だけで決して語れるものではないだろうと、それこそ、多分佐藤（昭）さんが言いたかったことを、僕が言うのもなんだが、研修ってなるとどうしても資質能力っていう中心的になっていくんだろうなと思う、題目としては。ただ、専門学校の先生たちのグループワークとか見ていて、結構盛り上がるのは、逆にそうじゃない、資質能力とは別の語りみたいなところで盛り上がるところっていうのはあるんじゃないかなと思う。でそこには、例えば、専門学校教員とはって定義したときに、ノンエリートの子達を、社会に送り出す、何とか社会に送り出す役割だ、みたいな定義だってできる、本当に1つの定義だが。そういったところで盛り上がる人たちっている。ハイパーエリートを育てるわけではないが、自分たちが、高校までは上手くいかなかった子どもたちを、何とか社会に送り出す、みたいなところに誇りを持っているよね、っていうところとか、本当にそういうような語りが結構出てくるのかなと思っていて、今のは本当に1例だが、そういった問いを、ここでもいろいろな形で入れながら、専門学校の先生って何なんだろうかっていうところを、テキストに入れ込みながら、専門学校教員の魅力とか、課題とかみたいなことをお伝えしていくということが大きなポイントになっていくのかなと思っている。先ほど佐藤（昭）さんの話だと、卒業生とか在校生に向けてもという話もあったので、これもちょっと今後の議論があるかなって思うが、現実的に言うと、やっぱり言うように、在学段階から専門学校教員になりたいという人は本当にちょっとだけなので、そこをターゲットにしてもなかなか厳しいだろうと思うが、やっぱりいざ専門学校の教員という舞台に参入した人に、気づいてない、これまで意識してないような魅力とかを、お伝えしていけるようなエッセンスを入れ込めるといいんじゃないかなっていうのは、僕の引き取り方なので、それこそ松田先生が言うように、後者の方、入ってきた人たちにちゃんと伝えていくというところが大事なのかなというふうに思う。佐藤（昭）さん、今の解釈であっているか。（植上）  ・補足、ありがとうございました。ちょっと私が、抽象度高く話をしてしまったところで、逆に迷惑をかけしてしまったかなと思う。私が魅力と言ったのは、これまでの話を聞いていて、言い換えるならば、専門学校の先生が果たしている社会的役割みたいなことを、ちゃんと伝えるっていうものが概論の中に入っていていいんじゃないかなっていうことを思ったということと、もちろん対象は、新任教員研修と言っているので、新しく先生がになった人が対象だと思うんですけども、昨日のTCE財団の方とかの話を聞いていると、在学中から准教員の資格を取る子もいただとか、そういう話も聞いていたので、要するに全員がもちろんいきなり先生なろうと思ってきてるわけではないっていうのは、もちろんそれはその通りだと思うが、ただそういう教職に関心を持ってる子、基本的には、まずはその前に卒業生なのかもしれないが、そこはもともと全く私の中では対象に入ってなかったが、もしそういうのに関心を持つ人がいるんだったら、学生時代からそういう内容に触れる機会があってもいいのかもしれないぐらいのトーンで話したので、基本的なメイン対象は、先生方が言っている通り、新任教員の方に対して、何を届けるのかっていうことが、第一優先かなっていうふうに思って、そういう意味での、魅力っていうことと、対象をある程度イメージして、話をした。で、補足してもらった植上先生の内容は、ほぼそういうふうに内容を伝えたかったので、ありがとうございます。（佐藤（昭））  ・でも、本当に専門学校の先生の社会的な役割っていうところが、あまりにも発信されないだろうなって思うので、そのあたり、普通の学校教員とかは、すごく自明だったりするものを発信していくっていうことと同時に、先ほどやっぱ小田（政）先生も言っていたように、普通の実践の中で、感じていくような魅力とか、ならではのことってあるのかなって思うので、そういったいくつかの視点で、そういった魅力みたいなことを、言語化していくっていうのも1つ手かなというふうに思いつついるが、あくまでアイデアで。本当にそれと、先ほどのシラバスの話とかが両立するんだろうかとか、どういう目次の構成になるんだろうかっていうのは、ちょっとまだわからないっていうのが正直なところだが。（植上）  ・もともとは、技術だけを教えればよかった、専門学校教員とはってなると、それは技術を教える、例えば簿記の知識を教える、料理の知識を教える、ただ資格を取るための、これだけの知識を教える、それをすればよかったけど、それだけじゃもう済まされないのが、現状になってるので、多分先生達が悩んでいるのは、学生との会話とかなんとかっていうのが出てきた。でも昔は、そんなのはいらなかった、専門学校教員には。技術だけ教えればよかった。美容師だったら、美容師の国家試験を受かるための技術だけを教えればよかったが、それだけでは先生では務まりませんよっていうのが現実になってきたところで、じゃあそれをどう研修でやっていくかっていうのが今悩んでるところじゃないかなと、僕は思っている。だからそういうのが盛り込まれていると、それと魅力がちょっとそこは魅力っていう点と、それがつながらない。（松田）  ・いや、別に私もそれすごい大きな大項目として掲げているというわけではなく、概論の中でそういうものも盛り込まれていればいいんじゃないかなって、あくまでアイデアとして、提示したもので、基本的なところで共通項としては、言っていたように、指導の部分は共通項として出てくるし、学生のケアのところも、やはり共通項として出てくるし、場合によっては留学生の異文化を持っている子たちに対する対応みたいなことも、もしかすると共通項として出てくるかもしれないので、基本的に概論の中で押さえておかないといけない要素っていうのは、他にもたくさんあると思うが、っていう全体の中での1つの項目として、そういう果たしている先生の役割を入れてもいいかなっていうトーンで話したが、このまま口頭だけで言っていても説明が難しいところがあるので、この後、研究メンバーで具体的にどういう概論づくりをしていくのかっていう議論の中で、必要に応じて提案させてもらえればと思う。（佐藤（昭））  ・今日のここまでのヒアリング結果、皆さんからの意見も聞きながら、最終的には教員概論の研修プログラム、その教材も含めてっていうところになると思うが、皆さんの話をききながら、ちょっと今調べて、そもそも今回の事業の企画書を画面共有させてもらう。こちらの企画書は6月頃に皆さんも見たと思うし、今、松田さんからでていたように、ちょっと迷子になっている感もあったので、改めてこちらの1つ目に書かれている本事業の目的としては「専修学校教員が抱える問題として、教員のキャリアモデルが見えないこと、キャリアへの定位の方法が明確でないことなどがあげられている想定のもと、それが早期離職や資質能力向上の障壁になっている。このことを解決する方法として、教員のキャリアモデルの具体的な提示や、それを基にして、アイデンティティやキャリアオーナーシップを自覚して、基礎枠（？）を学ぶための研修プログラムを学ぶための研修を開発・実施すること」ということが1つの中身になっているので、今年度の到達目標としては、教員のキャリア形成モデルと資質能力についての全体的な把握を整理する。で、その概論のテキスト、研修の枠組みを確定、に向かっていくというところで、なので1つ前のページに戻ったが、3年間事業で、最終的には令和7年度、概論研修プログラムの完成をさせるが、そこにあたって、今年度のところでいうと、私1つ気になったのが、キャリア形成モデルを検討するということが、今年に入っているので、植上先生や丹田さんなどの中には、キャリア形成モデルがある程度、形があるのかどうかわからないが、私がイメージするものとしては、例えば入社時に必要なスキル、であるいは3年目、5年目、10年目っていうふうな形で、それぞれの経験に応じて必要なスキルというものが、こちらで提示するのがモデルというものなのか、モデルができたら、じゃあそれを習得するためには、どういった研修というか教材が必要になるのかというのを落とし込むのが、教員概論のプログラム開発になるのかどうか。あるいは、先ほどからちょっと話にあった、新任の方だけにするものであれば、このキャリア形成モデルとプログラムの関係がどうなっていくのか、そういうことを含めた視点で、今後、今年度の最終に向けてってところと、次年度に向けてのってところを少し考えていく必要があるのかなというのは少し感じた。  ・ありがとうございます。全体の事業に関する、もう1回整理というか、振り返りをしてもらったかなと思う。成底先生が言っていること、懸念されていること、ちゃんと受け止めていきたいなって思っている。ただ、ちょっと思っているのは、先ほどから出ている魅力って話もあったが、やっぱりキャリアモデルとかキャリアアイデンティティっていうところが、結構大事かなって、それらの提示っていうのが、むしろ大事かなっていうふうに思っていて、キャリアアイデンティティっていうのが、先ほど言った魅力とかともすごく関係するような話なんじゃないかなって思うが、それこそ専門学校教員になることっていうような形でテキストのアイデアみたいなこととか、社会変化と専門学校の在り方っていうのとかも書いてあるが、おそらくここっていうのが、先ほど佐藤（昭）さんからも上げてもらった社会的な役割とか、社会的価値というところと実は関係してくることかなと思う。また専門学校の先生たち、それこそ松田先生が言っていたように、いきなり初めからなりたくてなってるわけじゃなくて、なった段階で色々考えていく、試行錯誤していくっていう人たちが、ほとんどの場合、彼らに対して、やっぱり専門学校の先生達っていうのは、こういうようないろんなキャリアのあり方っていう、またそのキャリアのあり方は、技能とか知識だけに収斂されるものじゃなくて、それこそライフキャリアも含めてとか、やりがいとかも含めての話で、提示していければいいんじゃないかなってイメージは少し持っているところ。その裏付けとか、データとしてのキャリア形成モデルのある種のこちら側での把握みたいなことをしていきたいというのはあるが、それをどの程度の解像度でやっていくのかっていうのは、ちょっと要相談というか、また資質能力に焦点を当ててやるのか、それともやっぱりちょっと違う形でやるのかみたいなところも、多分これからいくつか論点が出てくると思ってきているが、ただ着地点はそこにあるっていうのははっきりしているが、テキストを作るっていうところに、そこに至るまでにこういったプロセスを辿っていきたいなというふうに思っているが、成底先生、ありがとうございました、ちょっと迷子になりかけてるところに、補助線をもらった。（植上）  ・YICの小田（政）さんの悩みというか、疑問というか、今の松田先生の魅力っていう言葉に対する疑問とかっていうのが、それをお聞きしながらもう1度ちょっと解を探してみたら、企画書を見ると、少し頭が整理できるかなと思ったので、話をした。（成底）  ・植上  今回こういうような整理を続けているというところと、委員の先生方からこういう形で意見をもらって、見えてきたので、1度、研究者の方でミーティングをして、こういう形で整理できるんじゃないかとか、また論点整理、特に今後のテキストの作成に向けての、いくつかステップとか論点みたいなところを少し議論した上で、次のこちらの委員会を開催できればと思う。また、まだ終わってない福専各と工学院は今後やっていこうと思う。  6.今後の委員会日程  ・次回の日程：令和6年1月23日　15：00〜17：00（福岡）  ・最後の日程：令和6年2月22日　15：00〜17：00（福岡） |
| 配布資料 | ・第3回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会資料  ・YIC学院・麻生塾・KBC学園調査報告  ・国際総合学園インタビュー調査報告  ・TCE財団調査結果報告 |

以上